

東邦大学理学部生物学科における鳥類研究が可能な研究室

地理生態学研究室 長谷川雅美

鳥の研究できます。ただし、“鳥類学を指導できます”とは、恐れ多くて明言できません。これが、研究室運営にあたっての私の本音です。しかしながら、学問の継承と発展は人と人のつながりが担うものであり、現実には鳥類を対象とする研究をテーマに自らの道を切り開いてきた頼もしい学生を輩出する機会に恵まれてきたことを考えると、鳥類を対象とする研究を志望する学生は大歓迎です。

私自身、学生時代には長谷川博先生、樋口広芳先生の影響と間接的な指導を受けつつ、伊豆諸島の島々においてトカゲ類の個体群動態と生活史の比較研究に取り組み、クモの生態や昆虫の個体群動態がご専門の宮下和喜先生の下で、学位を取得しました。そういう経験を踏まえ、指導教員が研究する対象と自分の研究対象が一致しなくてもなんとかなる、むしろ良い面もあると思っています。さらに、学位取得後、山岸哲先生のおさそいで、マダガスカルでフィールドワークを行い、鳥類と爬虫類の種間関係に関する論文をまとめることができたのも、よい経験でした。

東邦大学には2000年に着任しました。長谷川博先生と生物学科の同僚となり、地理生態学研究室という名を提案してもらいました。この名は、鳥類好きのナチュラルリストにして偉大な理論生態学者の故R. マッカーサーの遺作となった地理生態学という本のタイトルに由来するもので、とても気に入っています。以来、対象生物にこだわらず、生物学という枠組みのなかで、様々な議論を交わし、長期の野外研究が生み出す成果の意義を確認することができました。

これまでに、地理生態学研究室で鳥類の研究に取り組み、学位を得た学生は、それぞれ自分で道を切り開いた鈴木俊貴君(修士)と小林篤君(博士)の二人です。さらに、伊豆諸島の生物群集研究の中で鳥類と植物の花粉媒介を扱った阿部晴恵(博士)さんもいます。後輩の藤田薫さんは、伊豆諸島のヤマガラをテーマにした生物地理学的研究で成果をあげてくださる大切なメンバーです。まだ論文として公表されてはいませんが、1995年から続けてきた伊豆諸島航路での海鳥センサスの結果を、湧昇流や島陰効果と結び付けて解析した研究や、コウノトリの野生復帰の基礎研究として水田のカエルやバツタの分布と生息密度を解析した研究もあります。今後の展望としては、伊豆諸島の島々でカラスの行動と生態の比較研究や、長年通って見知ったミクロネシアの島々でのトカゲ類と鳥類の相互作用にも面白いテーマがあります。興味があったら、ぜひ相談してください。

生物学科内には、他の研究室でも鳥類研究を行う機会があります。ダーウィンフィンチ類の嘴の進化発生学研究に取り組む土岐田昌和先生の動物進化多様性研究室では、さまざまな鳥類の機能形態に関する進化発生学研究が展開されています。井上英治先生(行動生態学研究室)は、これまで霊長類を主な対象としてきましたが、鳥類を含む遺伝マーカーを駆使した社会構造を研究する機会を得ることができるでしょう。近くの山階鳥類研究所には、副所長の尾崎清明先輩と後輩の森本元さんがいて、連携大学院の教授、准教授となってくださっています。

以上が、私からの紹介ですが、別の視点からの紹介として学部4年生の飯島大智君(と学位取得後間もない小林篤君からのメッセージも併せてお読みください。

(記：2017年1月23日)

飯島大智

地理生態学研究室では鳥類学に関してだけでなく、生態学や進化学に関する指導を受けることができます。研究室には鳥だけでなく様々な分類群を専門とする学生が所属し、日々多面的な議論が交わされています。私自身はこの研究室に入り 鳥の生態に関する知識を深め、生態学や進化学に関する幅広く深い指導を受けることで、鳥類を研究する楽しさが何倍も大きなものになりました。また雅美先生は生粋のナチュラルリストであり、日頃行っているフィールドでの観察についてお茶を飲みながら会話をすることができます。これもこの研究室の良さだと感じているところです。どんなことを明らかにするために研究を行い なぜその研究に鳥を用いるのか という研究を行う上で重要なプロセスは、鳥が好きで始めたバードウォッチングからだけでは身に付きにくいことを痛感しました。地理生態学研究室では、多くの仲間とともに、研究の基本的な考えやプロセスを学び、深めることを助けると共に 思考する力を養うことができます。ゆえに、鳥類研究を志す学生にとって、これ以上ない研究室であると感じています。ちなみに、私はライチョウの個体群生態に取り組む小林先輩のフィールド（北アルプス乗鞍岳）で、鳥類群集の垂直分布に関する卒論を行っています。

小林 篤

地理生態学研究室は、鳥類についての研究ができる研究室、というより鳥類も含めた様々な生物について野外調査に基づいた生態学研究を行うことができると言った方が良いでしょう。指導教員である長谷川雅美先生は、本来爬虫類や両生類の個体群動態や進化について綿密なフィールド調査を基に解明してきた先生であるが、鳥類も含めた様々な生物種に対する造詣も深い。そのため、先生のフィールド経験や幅広い知識の下、鳥類の研究“も”できる。ただし、当研究室のホームページにある過去の研究題目を見ればわかるように近年は、先生の専門である両生・爬虫類や鳥類だけでなく哺乳類や昆虫類に渡るまでかなり幅広い研究が行われている。個人の好みにより研究題目が設定できるのは当研究室の利点ではあるが、当研究室においてはサブテーマ的な研究である鳥類研究において継続的に行われているテーマ・調査地はない。よって学生自身が興味ある問題を設定し、解決方法を試行錯誤する自主性が求められる。

私に関わった鳥類研究論文(抜粋)

Abe H, S Ueno, T Takahashi, Y Tsumura, M Hasegawa (2013). Resilient Plant-Bird Interactions in a Volcanic Island Ecosystem: Pollination of Japanese Camellia Mediated by the Japanese White-Eye. PLoS one 8 (4), e62696

Fujita K, G.Fujita and M. Hasegawa (2011). Inference of population sizes and factors affecting distributional stability of three subspecies of Varied Tits among the Izu Islands. Bird Research 7

Hasegawa M, A.Mori, M,Nakamura, T.Mizuta, S.Asai, I Ikeuchi, H.Rakotomanana, T.Okamiya and S.Yamagishi (2009) Consequence of inter class competition and predation on the adaptive radiation of lizards and birds in the dry forest of western Madagascar. Ornithol Sci. 8:55-66.

長谷川雅美・浅田正彦・谷口薫美・黒野博之. 1996. 北伊豆諸島におけるサシバの行動圏の分布. 日本鳥類学会誌 45:83-89.

Hasegawa, M. 1990b. The thrush *Turdus celaenops*, as an avian predator of juvenile *Eumeces okadae* on Miyake-jima, Izu Islands. Jap J of Herpetology 33:65-69.

樋口広芳、長谷川雅美. 1985. ナミエヤマガラの一腹卵数. 鳥 33(4):127-128.